

## 「サイクルツーリズムの取組」

### 【具体的な取組内容】

#### 網走開発建設部の関わり

- 「オホーツクルート協議会」としては、協議会委員として参画し、ルート形成に携わる。サイクリングイベント等を実行する「サイクルアドベンチャーオホーツク推進協議会」はオブザーバーとして参画。
- 道路管理者として、走行環境の整備、受入環境の充実、情報発信等により地域の取り組みをサポートしている。

女満別空港を玄関口として、オホーツク管内に観光客を誘致し、管内自治体の周遊を促すため、サイクルツーリズムの推進に必要な環境づくりをソフトとハード両軸にて推進している。

主な取組内容内容は、以下の通り。

#### 案内看板・路面表示の整備

- サイクリストが迷わず安全に走行できるように、案内看板や路面表示の整備を行う。

#### 休憩施設等の充実

- 民間施設や関係機関と連携し、休憩施設や宿泊施設等の箇所の充実を図る。

#### 情報発信（サイクリングマップ等）

- 持ち運びしやすいサイクリングマップを制作し、道の駅や空港、休憩施設等で配布を行う。
- 大型商業施設でのサイクルツーリズム推進に向けた取組みのPRを行う。

#### ▼案内看板・路面表示の整備



#### ▼休憩施設



## 「サイクルツーリズムの取組」

### 【取組の効果】

#### サイクルアドベンチャーオホーツク推進協議会の取組

- モンベル（アウトドア総合ブランド）と連携し「**ジャパンエコトラック ルートマップ**」の作成を行い、イオン（大型商業施設）等にて配布。
- オホーツクエリアの素晴らしい絶景ポイントをサイクリトレーラーで移動し、各ポイントを自転車でかけめぐる移動サポート「**ハッカミントエクスプレス**」を実施。

### 【今後の方向性】

- オホーツク地域でのサイクルブランド化の構築、滞在型のツーリズムの実現を目指している。
- 令和5年新たに、宿泊型ロングライドイベント「**オホサイ2023**」を開催予定  
大空町→網走市→北見市→美幌町→大空町を走行する1泊2日のロングライド（令和5年7月15・16日予定）。
- 国道・道道・河川管理用道路の維持管理工事・業務受注者の協力のもと、パトロール車が巡回中に困っているサイクリストを見かけた場合、自転車工具と空気入れを無料で貸し出しする「**サイクリスト・応援カー**」の取り組みを令和5年度より開始した。

### 地域における関係者の声

#### スイーツ店をめぐるサイクリング

- サイクルアドベンチャーオホーツク推進協議会のレンタルサイクルの利用者の間では、**スイーツ店に立ち寄りながらのサイクリングが人気となっている**。「おいしいものを食べる、サイクリングで消費する」を繰り返すという好循環が、話題になったと思われる。そのきっかけは、ホームページに公開している「**ロコ・ソラーレが地元北見でグルメライドを走り、楽しみながら、地域の魅力をご紹介します！**」という動画と考えられる。

#### 地域限定商品の充実

- 北見市の観光客は、おみやげとして、北見市を訪れなければ手にすることができない、地域限定の商品を求めていると把握している。**「北見を訪問した証」となるような、地域限定の商品を充実させることを目指したい**。現在、北見駅のレンタルサイクル貸出・返却ポイントとなっている北見バスターミナルに直結する北見サイクルステーションに、地域限定のおみやげを取り揃えた売店の出店も進めている。

#### 地元ならではの食を楽しむ

- 常呂漁協直売所では、新鮮な**ホタテ**を購入できる。とあるイベントでは、自前の紙皿と割箸を用意し、各自、白米にホタテをのせて、醤油をかけた手製のホタテ丼が、**参加者に大きな感動**を与えた。

## 「ナマコ資源活性化プラットフォームの取組」

### 【地域の現状と課題】

#### 地域の産業の担い手である漁業振興、活性化

- 高齢化等により漁業者数が減少する中、生産空間を保持させるためには、漁業者の所得向上の検討、担い手確保の必要がある。

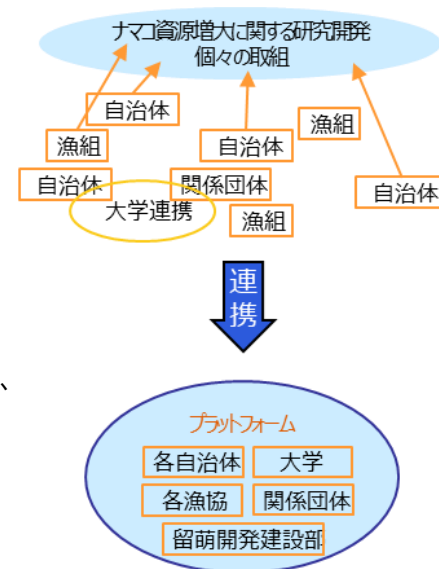
#### ナマコ資源の確保・増大のための取組

- 留萌管内において、サケ、ホタテに次ぐ栽培漁業としてナマコが期待されており、留萌管内のナマコ漁業者数は、増えてはいないが維持している。一方、ナマコの資源量の減少が懸念されており、適正な資源管理の実施、増養殖技術の確立が喫緊の課題となっていた。
- ナマコは、高額で取引されるため、乱獲や密漁の影響が大きく、資源の枯渇が進んでおり、資源確保のため、漁業者が、自主的に年間の漁獲量を制限しつつ、ナマコ漁業を続けている。
- 苫前町では、以前は、1隻あたり年間約5tのナマコを獲っており、10経営体で、年間約50tの水揚げがあった。しかし、資源減少に伴い、漁業者による自主的な漁獲量の制限が厳しくなっており、令和2年度には、1隻あたり年間3tまでに抑えられた。令和3年度からは、ナマコの漁模様が回復しつつあるため、1隻あたり年間3.2tまでとなっており、制限が少し緩められている。
- 毎年、密漁の情報は入ってくるが、昨年、あまり入ってこなかった。令和3年に大規模な摘発があり、海上保安庁の監視が厳しくなっていると判断され、避けられた可能性がある。また、平成30年の漁業法改正において、ナマコを含む、特定水産動植物の採捕禁止違反の罪が新設され、「3年以下の懲役、又は、3,000万円以下の罰金」となったことも、密漁の抑止力となっていると考えられる。
- 留萌管内のナマコ漁業者は、専業ではなくタコやヒラメ等の沿岸系の漁業に従事している方々が多くを占めており、年間を通して漁業に従事している。令和4年は、ナマコ1kgあたり約4,600円であり、ナマコは、短期間で年間の漁獲量を獲ることができ、また、主な経費も乗組員の人件費と燃料となるため、所得率が高い漁種である。
- 北海道に生息するナマコは、イボ立ちが大きいほど価値が高く、高額で取引されている。

### 【取組に至る経緯】

- 資源の減少が見えはじめ、各地で養殖や種苗放流の必要性が指摘され始めた頃、道南の上ノ国で、民間事業者がナマコ養殖に成功した事例があった。しかし、苫前町では、種苗生産の確立した技術を持っておらず、毎年試行錯誤を繰り返していた。当時の苫前町長が、「なんとかナマコ資源を増やすことが出来ないか」と留萌開発建設部の担当官に相談したところ、プラットフォームを設立し、意見交換の機会を設けることとなった。
- 留萌管内の一部の地域では、本取組前から、ナマコの種苗生産に取り組んでいた。例えば、増毛では、民間コンサル会社に委託し、留萌では、大学と協働し、既に成果が得られていた。
- 本プラットフォームは、自治体・漁業協同組合・学術研究機関・アドバイザー・オブザーバーで構成されており、学術研究機関には東海大学の教授や寒地土木研究所、アドバイザーにはマルハニチロ、オブザーバーには留萌開発建設部等が入っている。

### ▼プラットフォーム設立のきっかけ



連携により効果的な資源増大に向けた研究開発  
⇒ナマコ資源増大

### ▼プラットフォーム設立総会





## 「ナマコ資源活性化プラットフォームの取組」

### 【具体的な取組内容】

#### 留萌開発建設部の関わり

- 留萌開発建設部は、プラットフォームの立ち上げから関わり、運営をサポートしており、水産物輸出促進を図るため、屋根付き岸壁などの整備を進めてきた。
- 留萌管内におけるナマコ資源の活性化及びそれに伴う漁業者の所得向上に向け、自治体、漁業協同組合、学術研究機関、行政機関が連携して研究開発等を推進することを目的とし、平成29年にナマコ資源活性化プラットフォームを設立した。
- 第三種苫前漁港内水域を活用した「稚ナマコの生残成長試験」「水質、低質、DO、流況などの各種環境調査」を調査・検討している。

留萌開発建設部の具体的な取組は、下記の通り。

#### 取組成果のとりまとめ

- 令和3年度までの成果として、苫前漁港をケーススタディとしたに関する、以下の知見を取りまとめた『漁港水域を活用したナマコ資源の維持・増大方策(案)』を作成し、各団体へ配布、共有を行った。
  - ・ 「漁港水域を活用したナマコ人工種苗の中間育成方法」に関する知見
  - ・ 「漁港構造物へのナマコの生息環境機能付加方法」に関する知見

#### 令和4年度以降の取組内容

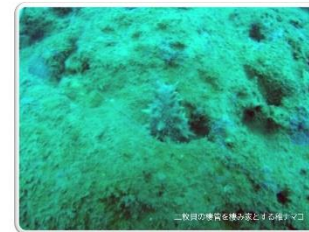
- 令和4年度は、苫前漁港東外防砂堤延伸部に「溝付き消波ブロック」及び「生息基質ブロック」を設置し、令和5年度以降、その効果確認のためのフォローアップ調査を予定している。

#### その他、地域での活動

- 取組当初の1～2年は、聞いたことがない情報や新たな情報を知ることができ、良い部分を吸収することができた。苫前町では、プラットフォームの設立前は、ナマコ種苗生産の成績がよくなかったが、各地域の取組を取り入れ、成績が好転した。
- プラットフォームで学んだノウハウを活用したことで、資源が増大したという直接的な因果関係は判明しておらず、ナマコ漁業者の自主的な制限による影響もあると考えられる。また、ナマコは、海岸付近で放流した場合でも、波に運ばれ、沖合まで流れるという文献もあるが、生態がわからない部分が多い。苫前町では、種苗放流の効果を調査するため、放流したナマコのDNAをあらかじめ調べておき、数年後に親ナマコのDNAを調べることで、種苗放流による個体なのか、自然発生による個体なのかを調査することを予定していたが、コロナ禍により、停滞している状態である。
- 広域でナマコ資源の増大に取り組もうという、プラットフォームの趣旨は良いと思うが、行政機関と漁業協同組合等の産業団体間で、考え方が異なっている部分があり、スムーズに進まないところもあると感じている。
- 現在は、年に数回、全道規模のナマコ養殖系の研究事例等を紹介する情報共有の場があり、技術確立が進んでいると思う。

### ▼漁港水域を活用したナマコ資源の維持・増大方策(案)

漁港水域を活用したナマコ資源の維持・増大方策(案)



令和4年2月

北海道開発局 留萌開発建設部

## 「ナマコ資源活性化プラットフォームの取組」

### 【取組の効果】

- プラットフォーム立ち上げ当初は、各地域がどのような取組をしているか把握できていない状態だったため、本活動は、各地域における取組を把握することに役立った。
- 例えば、留萌市では、ナマコ漁船全隻の収穫量をリモートで把握できるシステムを導入し、収穫量を制御する取組を進めているなど、資源管理方法について共有している。

### 【今後の方向性】

- ナマコのような高価な水産物以外でも、育てる漁業であれば、函館のガゴメ昆布等、他地域の品目にも活用できると考えられる。
- 各地域で様々な取組は既に行われているため、プラットフォームを活用して取組を推進する効果は限定的と考えており、他地域と協力して進めるという段階までは発展していないため、今後の課題である。
- 委員会について、大学の先生等の学識経験者が参加の委員会は平成30年度までであり、令和元年度以降は幹事会での情報共有にとどまっている。
- また、各地域の取組について、平成30年度までは定期的に見学会を実施していたため交流があったが、現在はコロナ禍で実施できていない状態であるため、今後の課題である。

### 地域における関係者の声

- **プラットフォームによって、苫前町で行っていた種苗生産等の方法には、誤っている部分があることがわかった。**例えば、苫前町では、親ナマコから卵を採る時期が、他地域より遅く、既に産卵を終えた親ナマコを獲り、産卵させようとしていた可能性が高かった。また、ナマコに排卵誘発剤を打つタイミングにもコツがあることを知った。**プラットフォームで学んだ様々なノウハウを取り入れ、それらの方法を改善したところ、翌年の成績が予想以上に向上した。**
- プラットフォームによって、各地域の状況を聞くことができるようになった。年に1回程度ではあるが、情報共有や成果の報告等、関係者が一堂に会し、話をする機会ができ、「この分野でわからないことは、あの人に聞こう」という、**漁業関係の人間同士のネットワークも構築できた。**
- 漁業協同組合に対し、種苗放流の補助金を支給していることもあり、費用対効果の検証の必要がある。そのため、**苫前町単独ではあるが、コロナ禍で停滞していたDNA調査を進めようと考えている。**なお、ナマコ1個体につき約7,000円（平成30年2月時点）の費用がかかるため、予算によって、調査規模は変動する。
- 現在は、栽培公社で3cm規模のナマコが養殖されており、各地域への流通が確立されているため、今後は、種苗を生産するより、栽培公社から購入して放流する方が、定着率が高くなる可能性があると思う。
- 種苗生産に取り組む中で、施設の限界を感じており、蓄養するための施設がないと、良いものができないと感じている。**今後、漁港整備に合わせ、陸上養殖施設や陸上蓄養施設も併設できるように整備していきたいと考えている。**

## 「オロロンライン・サイクリスト応援プロジェクトの取組」

### 【地域の現状と課題】

#### サイクルツーリズムを通じた地域活性化

- 人口減少等、地方課題を抱えるなか、観光客増加や地域の収益につながるような観光産業として、サイクルツーリズムの推進が必要であった。
- オロロンラインでは、以前、「日本海オロロンライントライアスロン国際大会」が開催されており、総距離244.7kmに及ぶ国内最長の大会であった。本大会は、地域全体で連携し、ボランティアを募りながら運営していたが、第20回目の2006年の開催を最後に、中止となった。
- 「日本海オロロンライントライアスロン国際大会」では、地域の方々がボランティアとして協力することで成り立っていた大会であり、千人に近い数百人規模のボランティアが集まっていた。大会に向けた練習や本番の時期になると、地域の大人たちが応援する姿や、ボランティアに勤しむ姿がみられ、レースの参加者やその家族、チーム等、様々な方々との交流の場となっていた。このように、もともと、オロロンラインは、自転車に親しまれたルートであった。
- 「日本海オロロンライントライアスロン国際大会」が中止となった原因のひとつとしては、ボランティアの方々が高齢化し、激減したことである。

#### 地元事業者・団体との連携

- オロロンラインは、各休憩施設が点在する上級者向け区間であり、ビギナー層やライト層の利用は難しい状況であった。
- サイクリスト受入環境整備においては、地元事業者等との連携が不可欠である。

### 【取組に至る経緯】

- 近年、サイクリングが盛り上がっていることを契機に、地域を訪れるサイクリストに安心して地域を訪れてもらうため、身の丈にあった、サイクリストを応援する取組を進めることとなった。
- オロロンラインでは、約20kmごとに道の駅があり、サイクリストの方々にとっては、ちょうどよい休憩場所、また、自転車の調子を見るタイミングとなっている。一方で、その20km間には、市街地がなく、時折、自転車トラブルで困っているサイクリストの方々を見かけることがあった。

### ▼管内のサイクリストの移動状況からみた課題



○留萌市を起点として、R232の海岸沿いを天塩町へ北上する経路が主  
 ○石狩・増毛—留萌間を通るルートそれほど多くない。  
 ○特に増毛—留萌間は、起伏の激しい区間に加え、トンネルや覆道が多い  
 →サイクリストからは敬遠されていると考えられる

### ▼休憩施設の設置状況からみた課題



○休憩施設となるコンビニや道の駅などは、留萌近郊や羽幌近郊では半径10kmの範囲で次の休憩施設に立ち寄ることができる  
 ○しかし、それ以外の町村境部分や内陸部は施設立地が乏しい  
 →休憩施設の少なさが不安要素

出典：第64回(2020年度)北海道開発技術研究会論文「一般国道232号における「三方良し」の自転車走行環境向上に向けて—「サイクリスト・応援カー」試行的実施の報告—」



## 「オロライン・サイクリスト応援プロジェクトの取組」

### 【具体的な取組内容】

#### 留萌開発建設部の関わり

- オロライン・サイクリスト応援プロジェクトは令和元年度から「萌える天北オロラインルート運営代表者会議」がサイクリストの受入環境を整備する目的で実施している。
- 留萌開発建設部はシーニックバイウェイ行政連絡会議として、萌える天北オロラインルートと協働で取組を推進している。

#### サイクルステーション化

- 令和元年度から、道の駅やシーニックカフェ等の指定されたお店に、サイクルステーション（自転車を立てかけるもの）を設置する取組を進めている。

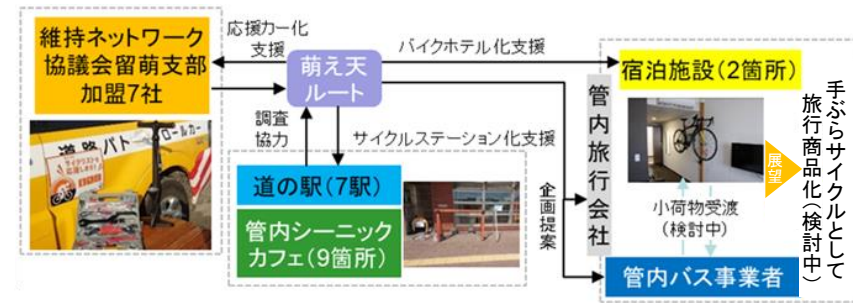
#### バイクホテルの試行的設置

- ホテル内に自転車を持ち込んで立てかけられる設備を試行的に設置している。

#### サイクリスト応援カー

- 萌える天北オロラインルートが発祥で、同様の取組が全道に展開されている。
- 区間を頻繁に往来する道路パトロールカーの強みを活かすことで、万が一のトラブルに対応できる「動くサイクルステーション」を管内一円で実現した取組であり、令和4年度から河川巡視業者も参加した。
- 道路パトロールカーに自転車用工具や空気入れを搭載し、道案内や工具貸出しなどでサイクリストを支援した。
- 道路パトロールの業者や、天塩川下流の河川パトロールをしている業者の方にも協力いただいた。
- 道路パトロールの方々の業務には、サイクリストの支援活動は含まれないため、去年は、貸し出した工具で修理後、その場に旗を立ててもらい、次の巡回時に工具等を回収するという方法で、支援した。

### ▼活動の体制（活動主体：萌える天北オロラインルート運営代表者会議）



### ▼メンテナンス講座の実施



サイクルツーリズム関係者やガイド、レンタサイクル事業者などを対象に応急的なメンテナンススキルを習得する講習会を開催

### ▼本プロジェクトで用いるロゴ（日本海の夕陽と風車をモチーフ）



### その他、地域での活動

- ホテル部屋へのバイクラックの取り付けを地域の宿泊施設に相談し、天塩町の宿泊施設に設置した。他町でも理解を得ており、予算の問題がなければ、設置できる状態であり、**地域の方々には、サイクリストを応援する根強い気概があることがわかった。**
- **自転車ラックを手作りで制作し、各道の駅や、サイクリストの方々が立ち寄る場所に設置した。**
- **サイクリストの方々が、出発地点で荷物を預け、バス会社が、その荷物を到着地点の宿泊施設まで届ける、というサービスを考えているが、現在は、コロナ禍で停滞している状態である。**
- 去年は、**留萌管内の道の駅等で、自転車御守を無料配布した。**自転車御守には、自転車トラブルで困った際のため、サイクリスト応援カーの取組も記載している。なお、地域の活動団体のメンバーに、住職の方がいたため、自転車御守に、交通安全の祈祷をもらった。